

高等学校における「キャリア教育」の実践と効果に関する考察

中村 至

1. はじめに（研究の目的）

「流動化社会」としてとらえられることの多い現代社会。その特徴的側面として、①国際化の急速な進展、②情報の高速化と過剰、③世代間の隔絶の恒常化、④雇用の不安定などがあげられる。

なかでも 2000 年代に入って、「雇用の不安定」は高校生をも直接的に襲う課題となった。高校生求人の減少による就職の困難さや、就職したとしても職場の人間関係の難しさという障害に直面することも多く、またそれによる短期間での離職も多く、これを繰り返すうちに、フリーターやニートになっていくという現象が社会問題化してきた。

また、行政サイドとしても 2003 年には「若者自立・挑戦プラン」を皮切りに、2004 年から「新キャリアプラン推進事業」が始まった。そして 2006 年の「教育基本法」改正では、第二条第二項に「個人の価値を尊重してその能力を伸ばし、創造性を培い、自主及び自律の精神を養うとともに、職業及び生活との関連を重視し、勤労を重んずる態度を養うこと。」と表現して、文部科学省を中心とする「キャリア教育」の推進に一層の拍車がかかることとなった。

こういった背景のなかで、札幌市の私立高校である北海道文教大学明清高等学校は、1988 年度から取り組んでいた普通科のコース制について 2007 年を転換点として、学習意欲を喚起し、学級集団をより強い目的集団とするために「キャリアプログラム選択制」の検討を進めていた。それに人生の計画に目覚め社会人職業人としての自立を目指すという視点を付け加えて、2008 年度から「キャリアプログラム選択制」を実施することとなった。

そこで、本研究は（仮説 1）柔軟な専門性を原理とする「キャリア教育」は、キャリア意識と学習意欲を高め、それによって「友人関係が充実する」と考える高校生の比率が高まる、（仮説 2）入学時に「キャリアプログラム選択制」を取ると、「生き方のモデル」をもっている生徒の比率が高くなる、（仮説 3）高校生は「主体性」を軽やかにとらえ「幸福感」を「目の前の小さな幸せ」に限定する傾向が強まっている、これが本研究の仮説として措定されたものである。

2. 研究対象となる高校の概要

まず、考察の対象となる高校の概要をかいつまんで説明しておく。当該の学校は研究者の勤務校であったという特殊な事情があるので、できる限りの客観性を保つために「本校」ではなく、「北海道文教大学明清高等学校」として考察を進めたい。

1950 年代後半に至って、後に「北海道文教大学明清高等学校」を運営することになる学園は中心母体であった栄養学校を短期大学に昇格するべく、北海道庁と文部省に働きかけ指導を受けたところ、ベビーブーマーが高校に進学する時期を目前に控えていることと、学校法人として基盤になる高等学校を設置することを先行するよう要請があり、1959 年 4 月札幌市の南郊に女子高校として開校された。入学定員は普通科 5 間口 250 名であったが、その設立の経緯からして公立高校の補完的役割を担っていたといえる。

1966年、創立者念願の食物科を増設し普通科と食物科の2学科体制となった。食物科は厚生省の認定校として卒業と同時に調理師の資格が取得できることとなり、社会に役立つ人材を育成するという学園の実学の伝統を引き継ぐものであった。食物・調理・栄養・衛生関係の専門科目と一般教養科目の均衡に配意し、人間性の陶冶を一方の柱とした。入学定員は普通科5間口250名に食物科1間口50名が加わり、学年定員総数300名となった。

1980年代後半に入り、男女別学から男女共学志向が強まる情勢を背景として1988年共学化し、普通科の中に半年間海外へ留学する語学留学コース、サッカー選手や指導者を養成する目的のサッカーコース、ホームヘルパーの資格が取得できる社会福祉コース、情報化時代をリードする人材育成の情報デジタルコース、大学進学を目指す総合進学コースの5コース制がスタートした。

2008年、普通科のコース制を再検討し、大学との接続教育を強化し、またこれを発展させて「キャリア教育」を中心に据え、「キャリアプログラム選択制」という特色を明確にして、進学強化の方向を打ち出した。学級数は普通科3間口、食物科1間口の総計160名の小規模でも質の向上を目指すこととした。普通科は「看護医療進学プログラム」、「探究進学プログラム」、「こども・福祉プログラム」、「サッカープログラム」、食物科も製菓衛生師受験資格も挑戦できるダブルスクール制をとり「調理・製菓プログラム」とした。進学強化策として、看護医療進学プログラム・探究進学プログラムは週2回7時間授業を組み、そのほかの日には放課後講習を定期的に計画実施している。

「キャリアプログラム選択制」の取組から卒業生を出した2011年から2013年の3年間の卒業生の現実の進路動向を見ると、卒業生総数354名中、大学進学95名(26.8%)、短大進学11名(3.1%)、専修学校進学124名(35.0%)、各種学校進学2名(0.6%)、就職70名(19.7%)、浪人等51名(14.4%)となっており、現時点では進路多様校の範疇を出てはいない。

3. 総論としての「キャリア教育」研究（先行研究Ⅰ）

2007年5月に「若者の希望と社会」というタイトルの叢書の第2巻として発行されたのが、児美川孝一郎の『権利としてのキャリア教育』（2007・明石書店）である。

児美川は先駆的な研究として、「キャリア教育」の本質論と展開の俯瞰図を提示した。その主張のポイントをあげておく。

児美川はまず、「教育行政関係者のあいだでは「2004年は、キャリア教育元年」とささやかれていたように、キャリア教育の推進は文部科学省がすすめる教育政策の主要な柱の一つに位置づいている。」（児美川2007：9）として、全国的な「キャリア教育」の取組の起点を2004年においた。

そして「キャリア教育」の主体は、あくまでも子どもたちであるとして「子どもたちをライフ・キャリアの主人公になれるような力を育てること、「生き方」全体の中に「働き方」をきちんと位置づけられるようにすることが、キャリア教育の目的」（児美川2007：74）とし、「子どもたち・と若者たちをエンパワーする課題を背負っているのが、筆者の主張する「権利としてのキャリア教育」である。」（児美川2007：81-82）とした。

そして、政策としてのキャリア教育を、「教育政策としての意図いかににかかわらず、政府レベルでの若者政策が、論じてきたような「構図」に基づくものである以上、教育政策は、今日の若年雇用問題の深刻化に対して、若者たちに意識「改革」を迫ることを通じて、“社会矛盾に教育によって始末をつける”といった格好の「役回り」を担わざるをえなくなるのである。」（児美川2007：134）

と批判する。

またキャリア教育の本質にある「キャリア権」について、「キャリア権を「職業をめぐる自己実現の権利」であると理解し、そのことを、憲法13条が規定する「幸福追求権」に基礎をおきつつ、憲法22条の「職業選択の自由」および憲法27条「勤労権（労働権）」によって構成されるひとつの法理として考えようとするのが「キャリア権」の考え方にほかならないのである。」（児美川 2007：145）として、憲法規定にその根拠があると指摘した。

そして、「キャリア教育」に取り組む基本的な姿勢を、「子どもたちの卒業後を見据え、彼／彼女らが社会人になったときの「社会的自立」を果たすための基礎的な力量形成という広義のキャリア教育が、学校の教育活動全体を通じて追求されるのと同様に、「権利としてのキャリア教育」の柱として提案した教育内容も、学校の教育活動全体を通じて教えられる。——これが、基本スタンスである。」（児美川 2007：165）とし、展開の豊富な試行を歓迎して「キャリア教育の創造へと向かう道は、学校の数と同じだけ多様に存在しうる。」（児美川 2007：176）と論じた。

4. 「キャリア教育」の個人尊重概念（先行研究Ⅱ）

北海道文教大学明清高等学校が職業教育の経験から「キャリア教育」の実践を始めていたのは、食物料という「職業教育」の実践が前提としてあったからに他ならない。

ここで、北海道文教大学明清高等学校が本田由紀の『教育の職業的意義』（2009・12 筑摩書房）から重視したところをあげてみよう。本田は「教育の職業的な意義とは、あくまで仕事の世界に対する基礎的で初歩的な準備を与えることである。実際に、仕事に就いてからさらに知識やスキルを伸ばしたり、更新したり、転換したりすることは、むしろ望ましいことである。しかし、初発の素地が何もないところでは、そうした事後的な発展すら生じにくい。職業的意義を持つ教育とは、個人が仕事の世界に参入する際の最初のとっかかりを与えることなのである。」（本田 2009：14）として、「教育の職業的意義」の基礎とした。

続けて原理となる「柔軟な専門性（flexpeciality・本田の造語）」について論を進める。

「特定の個別の職種にしか適用できないような、がちがちに凝り固まった教育ではなく、ある専門分野における根本的・原理的な考え方や専門倫理、あるいはその分野のこれまでの歴史や現在の問題点、将来の課題なども俯瞰的に相対化して把握することができるような教育である。それは、一定の専門的輪郭を備えていると同時に、柔軟な発展可能性や適用可能性に開かれているような教育である。本書は、このような意味での教育の職業的意義を表現するために、「柔軟な専門性（flexpeciality）」という概念を提唱する。」（本田 2009：14）また、「労働市場や社会福祉の変革」の重要性にも目配りを忘れず、「教育の職業的意義」を主張する前提としての「労働市場や社会福祉の変革」を訴える。「確かに、教育を変えても、労働市場も社会福祉も変化しないならば、苦境にある人々の状況は何ら改善されない恐れはある。しかし、本書が主張しようとしているのは、労働市場や社会福祉の変革はまずもって必要であり、それと並行して教育の変革も必要だということなのである。」（本田 2009：21）

一方、政策的に推進される所謂「キャリア教育」への危惧を感じている本田は次のように指摘する。

「「キャリア教育」はその対象となる若者の「勤労観・職業観」や「汎用的・基礎的能力」を高めるという政策的意図に沿った結果をもたらすよりも、そうしたプレッシャーのみを強めることによって、むしろ若者の不安や混乱を増大させてきた可能性が強いということである。」（本田 2009：155）

このように理論構築してきて、後の世代に対する大人としての責任と、続く世代の将来展望への願いとして「教育の職業的意義」を主張する意味を説いて締めくくる。

「教育の職業的意義」を高めるといふ私の主張は、自分よりも後から世の中に歩み入ってくる若者に対して、彼らが自らの生の展望を抱きうるような社会を残しておきたいという思いから立ち上がったものである。すでに述べたように、それは社会というパズル全体の中であくまでひとつの、しかし欠くことのできない重要なピースである。本書で述べてきた筆者の認識や提案を世に問うことで、閉塞した状況が少しでも動き出してくれればと願う。」(本田 2009: 214)

また、本田は『軋む社会』(2011・河出書房新社)の中では次のように述べている。「『柔軟な専門性』とは、特定の専門領域や分野、テーマを入り口ないし切り口としながら、徐々にそれを隣接・関連する領域へと拡張・転換していくことを通じ、より一般的・共通的・普遍的な知識やスキル、あるいはキャリアを身につけていくプロセスを意味している。」(本田 2011: 79) もう一カ所あげるなら、「また、『柔軟な専門性』の理念に基づくならば、ある時点で特定の専門分野を選択することが、個人のその後の進路を制約することがないように、補充学習などを通じた柔軟な転換のルートを整備しておくことも必要である。」(本田 2011: 82) だからこそ、この原理を普通科にも敷衍できるとして、次のように提言するのである。「こうした『柔軟な専門性』は、特色ある学科・コースの設置や学校設定科目の工夫を通じて、普通高校でも取り組まれる必要がある。専門高校では、専門科目と密接に関連づけながら、普通科目の教材や内容を選択することが、『柔軟な専門性』を実現していくうえで有効である。」(本田 2011: 80) これは北海道文教大学明清高等学校の実践においても理論的バックボーンとなった。

5. 北海道文教大学明清高等学校の「キャリアプログラム選択制」の目的と実践

2009年「キャリアプログラム選択制」実施の2年目、「キャリア教育」に対して教員集団としてあまり自覚的ではない北海道文教大学明清高等学校であったが、「コース制」を発展させた「キャリアプログラム選択制」の意味と意義を明確にするために、泥縄式ではあるが「教育戦略会議」を設定して、「キャリア教育の戦略的展開」を意図的に捉え返すこととした。

先例にとらわれずに仕事を進めることにした。「キャリア教育」の具体化を精力的に進めながらその問題点を深めながら理論化した。そこでポイントとなったのは次の諸点である。

①「流動化社会」に生きる高校生の対応能力を育むこと、②生徒の「主体性」を尊重し、また「建設的な主体性」を育むこと、③生徒の社会的経済的「自立」を実現し、幸福を追求する権利を保障し、「豊かな人生を実現する能力」を育むこと、④現下の日本社会の「格差の再生産」を断ち切る「聡明な進学能力」を高めること、⑤伝統としてもつ「職業教育の方法論」を大胆に適用すること、⑥「総合的な学習の時間」や「学校裁量時間」や「クラブ活動」を最大限に利用すること、⑦進路希望の変更によってプログラム間の「移動を容易にする」こと、⑧「社会人特別講師制度」を有効に活用すること、⑨「キャリア教育」に必要な学外連携やイベントの実施をためらわないこと、⑩何よりも生徒が「希望を抱けるキャリア教育」とすること、などであった。

そこから、「キャリア教育」の基本的な姿勢を、「この激しく流動する社会に対応していける能力を育むこと、主体的に自分の進路を選択し決定できる能力を育むこと、社会人として自立することによって社会に貢献することのできる能力を育むこと」として確認された。それはまた、「キャリアプログラム(生き方の計画)学習」とは、「どんな場面にあっても、そのことに生

きがいをもって取り組む方向に変えていくこと。そのことは世界が必要としていることであること。その生きる道を通じて社会に貢献することを目指す未来予想図を描くこと」でもあるとも確認した。

そして方法論としては漠然とした学習ではなく、「一定の職業教育」を先行させながら、学習意欲を向上させるというものであった。例を挙げると「看護医療進学プログラム」では、「総合的な学習の時間」には、看護師であり保健師でもある「社会人特別講師」を招いて「医療概論Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」を3年間学習し、医師会による「ふれあい看護体験」には毎年参加している。

「探求進学プログラム」では、英会話と中国語会話は、特別講師から3年間学び国際理解と外国語会話の能力を高めている。また、インターンシップの実習としてホテルや新聞社での実習を実施している。イベント的には全校で取り組むものとして、10月の「プログラム・進路学習 Day」、年度末の「なるにはガイダンス」があり、系列大学をはじめ道内各大学や専修学校の先生を講師に招いて企画実施している。講習は、希望の近い生徒がプログラムやクラスを超えて学習する「ユニット講習1・2・3」や「アドバンス（上級）」と、「ベーシック（基礎）」に分けた「夏季講習・冬季講習・センター対策講習」がある。

6. 調査の視点と調査の概要

2013年6月14日のHRの時間に北海道文教大学明清高等学校3学年総計81人に対して、生徒の意識の概要の把握のためにアンケート方式による量的調査を行った。調査は研究者本人が立ち会い説明をしてから自由記入の形式である。

なお、調査の内容を理解していただくために、集計結果についても併せて記入してある。

〈表－1・3年生アンケート（量的調査）〉

高等学校の生徒の生活とキャリア意識に関する調査

北海道文教大学明清高等学校

(2013/06/12 作成)

I) あなた自身のことについて

問1 あなたが現在のプログラムを選んだ理由について、次の中から選んであてはまる番号に3つまで○印をつけてください。

- | | | | | | | | |
|----------------------|----------------------|--------------------|-----------------------|-----------------------|--------------------------|-------------------|------------------|
| 1. 将来の仕事に結びつくから (51) | 2. 何となく興味があったから (21) | 3. 親・保護者が勧めるから (7) | 4. 中学の先生が勧めてくれたから (9) | 5. 友達・先輩が勧めてくれたから (5) | 6. 自分の学力にあっていなかったから (17) | 7. 部活を重視したから (12) | 8. 特に理由はなかった (4) |
|----------------------|----------------------|--------------------|-----------------------|-----------------------|--------------------------|-------------------|------------------|

問2 あなたが今勉強する理由について次のことがどれくらいあてはまりますか。

ア～エそれぞれについて、あてはまる番号に○印をつけてください。

とてもあてはまる	まああてはまる	あまりあてはまらない	まったくあてはまらない
----------	---------	------------	-------------

ア. 高校生のうちは勉強すべきだから・・・ ④ (17) — ③ (49) — ② (11) — ① (4)

- イ. つきたい仕事のために必要だから ④ (35) — ③ (35) — ② (8) — ① (3)
 ウ. 新しいことを知ることが楽しいから ④ (8) — ③ (27) — ② (38) — ① (8)
 エ. 希望の学校に入るために必要だから ④ (39) — ③ (25) — ② (8) — ① (9)

問3 あなたの今の高校生活について、次のことがどれくらいあてはまりますか。

ア～オそれぞれについて、あてはまる番号に○印をつけてください。

	とてもあてはまる	まああてはまる	あまりあてはまらない	まったくあてはまらない
ア. 学習活動が充実している	④ (5)	— ③ (44)	— ② (26)	— ① (6)
イ. プログラム学習実習が充実している	④ (9)	— ③ (34)	— ② (22)	— ① (16)
ウ. 実習の経験が学習意欲につながる	④ (12)	— ③ (36)	— ② (24)	— ① (9)
エ. 友人関係が充実している	④ (27)	— ③ (44)	— ② (9)	— ① (1)
オ. 現在の生活は幸福であると思う	④ (21)	— ③ (48)	— ② (11)	— ① (1)

問4 あなたはふだん、授業時間以外にどれくらい勉強しますか。あてはまる番号にそれぞれ1つだけ○印をつけてください。

1. ほとんど毎日する (週に6～7日) (7) 2. 週に半分以上はする (週に4～5日) (15)
 3. 週に半分くらいしかしない (週に2～3日) (27) 4. 週に1日くらいしかしない (10)
 5. ほとんど勉強しない (22)

II) キャリア教育について

問5 職業やキャリアに関する学習についてうかがいます。

ア. 学校の進路・キャリアに関する取組についてあなたはどのように感じていますか。ア～オそれぞれについて、あてはまる番号に○印をつけてください。

	とても役だっている	まあ役だっている	あまり役だっていない	全く役だっていない
ア. なるにはガイダンス・進路学習 day	④ (9)	— ③ (48)	— ② (20)	— ① (4)
イ. 校外の職場体験や実習	④ (27)	— ③ (39)	— ② (11)	— ① (4)
ウ. 総合的学習の時間の職業知識や技能	④ (8)	— ③ (42)	— ② (20)	— ① (11)
エ. ユニット講習・専門体育・専門実習	④ (10)	— ③ (37)	— ② (26)	— ① (8)
オ. 校内の進路希望別ガイダンス	④ (11)	— ③ (44)	— ② (21)	— ① (5)

イ. あなたが本校のキャリア教育について感じていることを3つ選んでください。

1. とてもためになる (9) 2. まあまあためになる (32) 3. 自分の学習意欲が上がる (14)
 4. クラスの人たちの目的が共通なので心強い (20) 5. これを価値あるものにするのは各自の自覚による (41)
 6. この知識が将来役に立つか不安だ (21)
 7. 将来のことは何とも言えない (27) 8. 普通の勉強で基礎力をつけたい (12)
 9. わからない (19)

ウ. あなたは本校のキャリア教育に対してどのような要望をもっていますか。

とても そう思う	まあ そう思う	あまり 思わない	まったく 思わない
-------------	------------	-------------	--------------

- ア. 社会で実際に役立つ基礎力をつけてほしい・・・④ (42) — ③ (33) — ② (5) — ① (1)
 イ. 職業体験など実践的な活動を多くしてほしい・・・④ (50) — ③ (26) — ② (5) — ① (0)
 ウ. 受験に関わりなく職業知識をつけてほしい・・・④ (23) — ③ (42) — ② (14) — ① (2)
 エ. 将来の就職を意識した進学指導をしてほしい・・・④ (40) — ③ (31) — ② (8) — ① (2)
 オ. ともかく受験に必要な学力をつけてほしい・・・④ (29) — ③ (34) — ② (13) — ① (5)

問6 職業やキャリアに関する学習において、あなたが自分にとって特に必要だと思う内容について3つまで選んで○印をつけてください。

1. 生きること働くことの意義 (23) 2. 社会人としての考え方やふるまい (43)
 3. 賃金や労働時間などの労働条件や権利 (18) 4. 産業や経済の知識, 企業のしくみ (3)
 5. 就きたい仕事で必要とされる知識や能力 (62) 6. 社会人としてのコミュニケーション能力の訓練 (50)
 7. 人生設計の考え方 (1) 8. 仕事選びの考え方や自分の適性 (17) 9. 職業やキャリア情報の調べ方 (3)
 10. その他 (具体的に: (0))

Ⅲ) 「理想の大人」の存在について

問7 あなたの「理想の大人」像についてうかがいます。

ア. あなたには、「あの人のような生き方をしたい」と思う人はいますか。

1. いる (48) 2. ほしいがない (18) 3. いないしほしくない (6) 4. ありえない (3)
 5. その他 (6)

イ. 「1. いる」と答えた人はあなたとどのような関係にある人ですか。

1. 親(17) 2. 先輩(3) 3. 親以外の家族(祖父母や兄姉)(6) 4. 芸能人・ミュージシャン(10)
 5. 今までで出会った教師 (9) 6. スポーツ選手 (6) 7. 知り合いの人 (4) 8. 実業家 (1)
 9. 芸術家 (0) 10. 政治家 (0) 11. 医者 (0) 12. 学者 (0) 13. 歴史上の人物 (3)
 14. 映画や小説やコミックの中の人物 (2) 15. その他 (2)

ウ. あなたの「理想の大人」の人はあなたの思いに対してどのようなスタンスで対してくれていますか。あてはまる番号に○印をつけてください。

1. 知っていて応援してくれている (15) 2. 知っていて見守ってくれている (7) 3. 知っているが一定の距離を置いている (0) 4. 一方的な思いなので知らない(19) 5. 関わりがない(8)

Ⅳ) 社会・将来・未来について

問8 現在は流動化社会といわれますが、次のような考え方についてあなたはどのように思っていますか。

ア～オについてあてはまる度合いを選んでください。

- | | とてもあてはまる | まああてはまる | あまりあてはまらない | まったくあてはまらない |
|---------------------------|----------|----------|------------|-------------|
| ア. 国際化に適応できる能力をもつべきだ・・・ | ④ (19) | — ③ (51) | — ② (9) | — ① (2) |
| イ. 社会の情報に敏感に反応することが大事だ・・・ | ④ (20) | — ③ (51) | — ② (9) | — ① (1) |
| ウ. 変化する労働や雇用の状況を把握すべきだ・・・ | ④ (20) | — ③ (53) | — ② (7) | — ① (1) |

- エ. 価値観の変化に柔軟に対応するべきだ・・・ ④ (19) — ③ (51) — ② (10) — ① (1)
 オ. 社会の変化よりも仲間を大切に生きたい・・・ ④ (23) — ③ (51) — ② (7) — ① (0)

問9 あなたは自分の将来設計をするうえで、次のようなことはどれくらい重要だと考えていますか。ア～オについて、あてはまる番号に○印をつけてください。

	とても重要 である	まあ重要 である	あまり重要 でない	まったく重要 でない
ア. 生きがいのある人生を送ること・・・	④ (55)	— ③ (24)	— ② (1)	— ① (1)
イ. 社会的に評価の高い仕事をする・・・	④ (7)	— ③ (39)	— ② (32)	— ① (3)
ウ. 周囲の人と共に充実した人生を送ること・・・	④ (41)	— ③ (37)	— ② (3)	— ① (0)
エ. 人生の歴史を語れるような生き方を・・・	④ (6)	— ③ (26)	— ② (43)	— ① (6)
オ. 目の前の小さな幸せを大切にすること・・・	④ (62)	— ③ (19)	— ② (0)	— ① (0)

問10 あなたは自分の将来の生活について、次のことはどれくらい重要だと考えていますか。ア～エについて、あてはまる番号に○印をつけてください。

	とても重要 である	まあ重要 である	あまり重要 でない	まったく重要 でない
ア. 社会に参画し貢献する生活をしたい・・・	④ (20)	— ③ (47)	— ② (12)	— ① (2)
イ. 世界をフィールドに活躍したい・・・	④ (6)	— ③ (19)	— ② (44)	— ① (12)
ウ. 地元で仕事や生活をしたい・・・	④ (21)	— ③ (30)	— ② (25)	— ① (5)
エ. 人並みでも安定と幸福を大事にしたい・・・	④ (54)	— ③ (25)	— ② (2)	— ① (0)

問11 あなたは自分が主体性をもって生きるために、次のことはどれくらい重要だと考えていますか。ア～エについて、あてはまる番号に○印をつけてください。

	とても重要 である	まあ重要 である	あまり重要 でない	まったく重要 でない
ア. 自分のことは自分で決定する・・・	④ (42)	— ③ (38)	— ② (1)	— ① (0)
イ. 何でも自分から進んで実行する・・・	④ (36)	— ③ (39)	— ② (6)	— ① (0)
ウ. 自分が納得できる生き方を・・・	④ (57)	— ③ (21)	— ② (3)	— ① (0)
エ. 常に自分自身の向上を目指す・・・	④ (45)	— ③ (30)	— ② (6)	— ① (0)

問12 あなたの社会人としての自立のためには、次のことはどれくらい重要だと考えていますか。ア～エについて、あてはまる番号に○印をつけてください。

	とても重要 である	まあ重要 である	あまり重要 でない	まったく重要 でない
ア. 何よりも経済的に自立すること・・・	④ (33)	— ③ (47)	— ② (1)	— ① (0)
イ. 精神的に立派な大人になること・・・	④ (42)	— ③ (29)	— ② (0)	— ① (0)
ウ. 自分の責任をきちんと果たすこと・・・	④ (62)	— ③ (18)	— ② (1)	— ① (0)
エ. 周囲の幸せを大切にすること・・・	④ (56)	— ③ (22)	— ② (3)	— ① (0)

*この調査はみなさんの「生活意識と進路意識」の把握と「キャリアプログラム選択制」の改善、そして中村の「キャリア教育研究」のために使用いたします。ご協力有難うございました。

7. 考察

調査とそれに基づくインタビュー調査とマトリックス分析から特徴的な点について考察を進める。

7.1 学習意欲・友人関係

「学習意欲」については問1・問2から見られるように、抽象的な学習目標よりも「将来の仕事に結びつくから」51人(62.9%)とか「希望の学校に入るのに必要だから」64人(79.0%)といった具体的に将来像に結びつく「キャリア教育」の具体的なアプローチが、明らかに学習のモチベーションに結びついている。

「友人関係」については、問3からも明らかなように「友人関係が充実している」71人(87.6%)と回答する生徒が多い。これは、ライバル意識を越えて「共通の目的意識」による連帯感の醸成が功を奏していると思われる。「友人関係」と「キャリア教育」の関係については、「クラスの人の目的が同じで、心強い」20人(24.7%)という回答に代表されるように、「キャリア教育」が優先しているので、「友人関係」が良くなるというデータの逆順の関係であることが読み取れる。

この世代の生徒にとって、「友人関係」の構築が極めて重要な課題であることを強く認識させられる。その状況のもとで、「キャリア教育」を優先させた学級集団づくりが、大きな効果を上げていることがわかる。たとえ途中で志望を変更したり、まったく違う進路を取ることになったとしても、入学当初の精神的な紐帯がその後もお互いを強く結びつけるものになっていることがうかがえる。

7.2 「理想の大人・生き方のロールモデル」について

「ロールモデル」に関しては、問7の調査の中で「あの人のような生き方をしたいと思う人がいますか」という表現で聞いてみた。すると48人(59.3%)が「いる」と答えた。「あなたとどのような関係にある人ですか」という問には①「親」17人(35.4%)、②「芸能人・ミュージシャン」10人(20.8%)、③「今までで出会った教師」9人(18.7%)、④「親以外の家族」6人(12.5%)、同じく④「スポーツ選手」6人(12.5%)。これはサッカープログラムがあるから当然である。続いて⑥「知り合いの人」4人(8.3%)、⑦「先輩」3人(6.2%)、⑦「歴史上の人物」3人(6.2%)、⑨「映画やコミックの中の人物」2人(4.2%)、⑨「その他」2人(4.2%)である。

これにベネッセの全国調査「高校データブック2013」を対置してみる。「あの人のような生き方をしたいと思える人」が「いる」が17%。順位は、①「親」16.5%、②「先輩」15.6%、③「芸能人」13.8%、④「教師」11.0%、⑤「スポーツ選手」9.2%、⑥「知人」6.5%、⑦「実業家」5.5%、⑧「医者」1.8%、⑨「学者」0.9%、⑩「その他」19.3%である。比較すると、随分と違う分布になっているといえる。

全国調査との対比でもっとも大きな違いは、「あの人のような生き方をしたい人」が「いる」が本調査59.3%に対して、全国調査では17%と大きな差があり、その中で対象が「親」は同じく1位ではあるが、本調査では35.4%であり、全国調査では16.5%という差である。

それは、入学時にプログラムを選択している高校生と一般的な高校生であることの違いがもっとも大きな要因であると思われる。高校進学決定の段階からそう強くはないにせよ「仕事」や「分野」を意識しているのであるから、漠然としたものではあったとしても、生き方のモデルをもっている比率が高いと考えられる。

幼時体験から職業選択に結びつくことは、それなりに多いケースである。ただそれが単なるあこが

れや感謝から、現実的な職業像にするためには、職業体験やインターンシップはかなりの程度有効である。

両親・保護者をロールモデルとするケースも少なくない。ただこの場合も、職業人としての視線で見る距離感と客観性の確保が必要である。ロールモデルを不要あるいは拒否する高校生も存在する。個人の生き方として、厳密に考えるなら、誰でもが必要とするものではないというもの、ひとつの貴重な認識である。特に「こども福祉プログラム」の生徒が強くこのような論理を展開したのは、「ひとつひとつのいのち」を大切にしたいという願いの進りとして注目したい。

7.3 「主体性・幸福感」について

問9・問10・問12の部分の「主体性・幸福感」についてはこの世代の顕著な傾向が見られる。

「主体性」については、「あなたは自分が主体性をもって生きるために、次のことはどれくらい重要だと考えていますか。」というたずね方をしてみた。

これを「とても重要」を優先して、「まあ重要」を加算して順位を付けてみる。①「自分が納得できる生き方をする」が57人(70.3%),「まあ重要」が21人(25.9%),合算で78人(96.2%)。②「常に自分自身の向上を目指す」が45人(55.5%),「まあ重要」が30人(37.0%),合算で75人(95.0%)。③「自分のことは自分で決定する」が42人(51.8%),「まあ重要」が38人(46.9%),合算で80人(98.7%)。④「何でも自分から進んで実行する」が36人(44.4%),「まあ重要」が39人(46.9%),合算で75人(95.0%)。

ここに見られる傾向は、「自分が納得できる生き方」をもっとも重視しているが、続く「常に自分自身の向上を目指す」という真面目でよく努力しようとする高校生の姿が浮かびあがる。また、所謂「自己責任論」とは違って、自分が納得できる人生を自分の責任において実現しなければ充実した人生にはならないという健気な覚悟も感じられる。これは入学当初からある程度の専門性を意識して自己開発している集団の中にいることの意義が大きいともいえる。

また「自分のことは自分で決定する」と、「進んで実行する」がやや低率になったのは、いざ「決定」や「行動」となれば、慎重になる高校生の傾向がうかがえる。「主体性」については、「自分のことは自分で決定する」と回答する生徒がほとんどであって、言葉にするとときに微妙な表出上の差異があるに過ぎない。しかし、その微妙な差異が「自己責任」を引き受ける度合いを示している傾向もあるので注意したい。

「幸福感」については、「あなたは自分の将来設計をするうえで、次のようなことはどれくらい重要だと考えていますか。」というたずね方をした。

すると①「目の前の小さな幸せを大切にすること」が「とても重要」とするが62人(76.5%),「まあ重要」が19人(23.5%),合算で81人(100%)。全員が「目の前の小さな幸せを大切にすること」と回答している。

これは②「社会的に評価の高い仕事をする」とは極めて極端な対比を示す。「とても重要」が7人(8.6%),「まあ重要」が39人(48.1%),「あまり重要でない」が32人(39.55%),「まったく重要でない」が3人(3.7%)。「社会的評価」は46人(56.7%)とほんの僅かだけ肯定的なのである。

ここに見られる傾向は、高校生は「社会的評価」などより、圧倒的に「目の前の小さな幸せ」を優先する考え方をすることがわかる。では、これを所謂「若者のコンサマトリー化」とだけ整理してい

いのであろうか。

実現可能な希望を掲げて、その達成感を味わいながら、「目の前の小さな幸せを大切にする」人生を進んでいこうとする堅実な姿勢は、我が国に古来ある「我ただ足ることを知る」境地に通じると積極的に評価できるといえるのではないか。「社会的価値」や「社会正義」を唱える存在にうさんくささを感じるのは、この世代特有の直観的な反応でもあるだろうが、いつときは時代の寵児として社会の耳目を集めても、三年もたてば馬脚を現すたくさんの例を現代の高校生も見ているからであろう。

自分の心から出るものでなければが容易には信じられない、とくに移ろいやすい社会の価値や評価にそれほどの信頼は置けない。家族の幸せのバリアを最優先することがいけないことだと誰がいえるのだろうか、と高校生はとらえている。高校生の多くは、社会や世界がひとりひとりの幸福の追求のために存在するという見方に立つことの方が、健全で平和な世界を作ることにつながると考えているのである。

8. まとめ

8.1 仮説の検証

本稿の分析と考察からは、冒頭に示した仮説、(仮説1) 柔軟な専門性を原理とする「キャリア教育」は、キャリア意識と学習意欲を高め、それによって「友人関係が充実する」と考える高校生の比率が高い、(仮説2) 入学時に「キャリアプログラム選択制」をとると、「生き方のモデル」をもっている生徒の比率が高い、(仮説3) 高校生は「主体性」を軽やかにとらえ「幸福感」を「目の前の小さな幸せ」に限定する傾向が強いこと、はいずれも正鵠を射ているという知見が得られた。

8.2 ベネッセの実力判定テスト最近3年間の結果から

また、下記のグラフはベネッセの実力判定テストの当該学年集団の「平均点偏差値」の推移である。この3年間で見るとわずかずつではあるが、集団として学力と学習意欲が上昇していると見ることができる。

[現3年生]

回	実力判定4月	実力判定6月	実力判定9月	実力判定1月
科目	英数国	英数国	英数国	英数国
高校1年次(平成23年度)	47.8	50.1	50.5	49.6
高校2年次(平成24年度)	50.1	51.3	49.9	51.6
高校3年次(平成25年度)	51.2	53.7	51.3	

ここで特に強調しておきたいのは、入学したての4月の「平均点偏差値」が、2ヶ月後の6月には2.3ポイント上昇していることである。これは、学級集団が目的を共有することで、学習のモチベーションが向上していることを示していると解釈できる。これは、学級に入ってみるとすぐに実感する。ここに「キャリアプログラム選択制」のスタート時の教育効果が端的に示されている。

8.3 今後の課題

柔軟な専門性を原理とした「キャリア教育」である「キャリアプログラム選択制」は、まだまだ発展途上である。今後の課題について要点をまとめておく。

一つめは、「一定の柔軟な専門教育」による「キャリア教育」を通して、基礎教養の充実と関連づけて職業的自覚を促す教育と、実践的な進学教育の充実を両立させることが、生徒の将来の可能性を保証する本当の未来開拓力になるということ。

二つめには、学年や学期の途中で進路希望を変更した生徒に対する、きめ細かなフォロー体制の準備を大胆にできるような組織づくりをしなければならないということ。

三つめには、「学ぶ集団づくり」から「確固とした自分の成長の確信」に繋げる、自己確認の方式の創出があれば、生徒の自信が客観的で検証可能なものになるはずであること。

四つめには、政府の「平成 25 年度年次経済財政報告」の「何らかのキャリア教育が正規雇用へのきっかけとなっている」という指摘が、ともすれば「正規雇用」にさえなればいいという風潮を生み、「非正規より厳しくつらい正規雇用」がはびこる素地になってはならないことをおさえておきたい。

なお、本研究のためには量的調査に加えて、当該の学年の在校生と、コース制とキャリアプログラム選択制のもとの卒業生に対するインタビュー調査とマトリックス分析を行ったが、今後の発表では分量の関係で直接的には盛り込むことができなかった。しかし考察の背景にはそれらは十分に反映されていることを察していただけるものと思う。ここにその経緯を記して協力してくれたたくさんの方々に心から感謝する。

文献

Benesse 教育研究開発センター，2013，『高校データブック 2013』ベネッセコーポレーション

本田由紀，2009，『教育の職業的意義』筑摩書房

本田由紀，2011，『軋む社会』河出書房新社

児美川孝一郎，2007，『権利としてのキャリア教育』明石書店

A Study of the Practice and the Effect of Career Education in High School

NAKAMURA Itaru

Abstract: The three hypotheses stated at the beginning of the present study were proven to be true. They were: 1) career education which is deeply rooted in a flexible specialty is a principle which enhances students' career consciousness and raise their motivation in learning, which in turn leads to a higher proportion of high school students who think such education enriches their relationships with their peers; 2) introducing a career programme choice system at the time of entry to high schools leads to a higher proportion of students with life models; 3) high school students tend to take their independence lightly and thus tend to limit their feelings of happiness to happiness found in everyday life.